

論 說

山本有三の初期作品をめぐる（上） —音読による授業構成の試み（6）—

渡辺 和靖

要 旨

音読をとおして作品の内容のみならず、言葉の響きやリズムをとおして、時代の雰囲気を理解させる試みを、山本有三の初期の戯曲作品を例として論述する。また歌舞伎の影響の残る明治の戯曲界に、清新なスタイルと思想性をもって登場した山本有三の初期作品を制作順に読み解いていくことによって、テーマの広がりや、思想の深まりを跡づけていく。ここではその前篇を掲載する。あつかうのは1910年制作の「穴」から1914年の「曼珠沙華」まで。

キーワード：授業構成、音読、山本有三、初期戯曲

はじめに

本稿は授業実践の記録である*。

〈音読による授業構成の試み〉シリーズにとって、戯曲作品を取り扱うことは、きわめてその意図に沿っているとと言える。それぞれの登場人物に感情移入してその科白を音読することは、作品を理解するうえで、また自らの感情を開放するうえで、ひじょうに効果的であると言える。

山本有三は、伝統的な歌舞伎劇の改良でお茶を濁したり、大胆に西洋の翻訳劇に向かうなど、暗中模索のなかにあった、明治の演劇界において、身近な生活や社会現象を取り上げ、そこに思想の劇を展開した。そこには、明治の終わりから大正期にかけて芽生えた、新しいヒューマニズムの思想が表現されている。

第2次大戦が終結したとき、ひとびとは、戦時体制という異常な時期が終了し、大正時代がもどってくる考えたという。終戦後の一時期、山本有三をはじめとして、安部能成、和辻哲郎などの哲学者、武

者小路実篤などの文学者が、論壇の中心を占めたことがあった。これらいわゆるオールド・リベラリストは、やがて、解放された未決・既決の共産党員や、帰国した亡命党員が発言力を強めるなかで、また、東西冷戦が始まり政治的対立が激化するなかで、しだいにその影響力を喪失して、論壇から姿を消していくことになる。

しかし、山本有三の存在は、日本の戦後改革が、たんなるGHQによって押しつけられた付け焼き刃の民主化ではなく、日本の近代化の中で成熟し開花した独自のヒューマニズム、リベラリズムの延長線上にあることを教えてくれる。1990年代の半ばに至って、大正の終わりから昭和の初めにかけて女流の童謡作家として活躍した薄倅の詩人金子みすゞが、共感を持って再評価されるような事情も、戦後の民主主義が大正のヒューマニズムと地続きのものであることを示すものである。たんなる押しつけの民主化がけっして成功しないことは、このたびのイラク戦争が証している。日本近代のよき伝統を掘り起こし、未来のために参照することはきわめて重要

な作業であると考える。

1 「穴」——運命からの逃避

山本有三は、1887年、栃木県下都賀郡栃木町に山本元吉、ナカの長男として生まれた。栃木尋常小学校、栃木高等小学校を経て、1903年、家業を継ぐための修業として、東京浅草の伊勢福呉服店に丁稚奉公に出されるが、翌年には奉公先を逃げ出し郷里の家に帰っている。勉学の意思が止みがたかったのである。1905年に上京、2度の挑戦を経て1909年に第一高等学校文科に入学。在学中から戯曲を書き始めた。

有三の戯曲第1作「穴」は、1910年3月『歌舞伎』に発表され、翌年2月、東京俳優学校生徒の劇団によって上演された。1幕物で、登場人物は坑夫5人の他、鉄車夫、坑夫志望者などである。

工夫の長三はカンテラの火が消えたので、為吉に火を貸してくれと頼む。

為吉 おいきた。(カンテラを取り長三の方に出す。)然し長さん、お前は無暗と気にし過ぎるからいけねえ。そんな事気にかけてつて始まらねえやね。ううんと(力をこめ)やけに岩が頑固だなア。

長三 (やうやく点け終り。)有難う。なアに気にするつて訳ぢやねえんだが、どうも性分なんだね。それに此七番坑に降りてつからつてのものは、病気も段々悪くなる許りだもんだから、つい何かとかつぐのさ。

為吉 (カンテラを再び巖角に吊し、為事を続く。)病気の方だつてさうだ。余りくよ
✓しねえ方がいゝぜ。

重労働の中で死に脅える長三、慰める為吉。

長三 そりや承知しているがね……実はなア、為さん、昨日黒え痰の中に赤えものが交つて出やがつたんだ。どうも己は助からねえかもしれねえ。

為吉 お前は気が小せいからいけねえ。それつばかりで人一疋さう死んでたまるもんけえ。それにお前は何だらう、午年だつたらう。俺から見や十歳も若いんだ。

長三 むかし俺の親爺の時代にや、坑夫の寿命は二十七留め、三十は長命だといつたもんだ。それから見ればおア余程長生きしてるんだ。だけど己はまだ死にたかねえよ。

午年の長三は1870年生まれの40歳、為吉は50歳である。

秀治郎が坑夫志望の山一を案内してくる。

山一 這入りたては何程位の手間が取れるんでせう。

秀次郎 さうよな、一人前の坑夫は八十銭というのが極りなんだが、新前ぢやマア四貫か精々五貫だの。然しそんな柔けい体で坑夫をやるつもりか。

山一 やつて見るつもりです。

為吉 (カンテラを取り山一照らし見つゝ)とても体が続きさうもねえや。

秀次郎 お前は何商売だつてな。

山一 陶器商に勤めていたんですが、前にも申しましたやうに、主人の金銭を遣込んだんですから、世間には出られないんです。

坑夫に身を落とすものたちの身の上が語られる。秀次郎は、さっきから仕事が手に着かない安太に気付く。安太は鉱車の線路に横たわっている。

鉄助 危ねえツ、誰だいそこに寝てるな。

(鉱車中にも人あり、其人も車中よりカンテラを差出し)

車中の人 危ねえア、一体誰だい。

安太 己だよ。(漸く立上る。)

鉄助 (安太の側に来り) 安太か。

安太 おう。

鉄助 おうちやねえ。少し気をつけろ。

車中の人 もう少しで轢殺される所だつたんだぞ。

安太 まさか忠さん引つ殺されねえよ。もう一尺来たら退かうと思つてたんだ。

安太は過酷な労働に心を病んで、危険な遊びに逃避している。

忠平 どうしたら又こんな真似をするんだ。

安太 線路の響を聞くんだよ。

忠平 線路の響を聞いて何処が面白いんだ。お前のうす馬鹿にも困つちまふな。

安太 どこが面白いつて聞きもしねえで分るけえ。忠さんが坑外で芸者あげて弾かせる三味線なんぞよりや余程面白いぜ。あんな疲れた音ぢやねえや。

忠平 生意気言ふな。

安太 何だつて生命がけの響なんだからね。世界にこれ程いゝ音はありやしねえ。ほんとに身も心もとろけつちまふやうだぜ。嘘だと思ふんなら、忠さん、今度耳を当てて見な、そりや堪らなくいゝから。

話題は鉾山における差別の問題に移る。

忠平 (よき所に腰を下し) 見張りの奴等己等を狎ころか豚でも追廻すやうに、大きな面してものを言ひやアがるから、糞に障らア。第一己等はかうやつて真暗え所に這入つて汗水たらして稼いでゐるのに、彼奴等ア坑外で何にもしねえで遊んでゐるんだ。それで給料はつてえと、己等たア比較にならねえ程取つてるぢやねえか。為さん、こゝん所を考へて見ねえ。働かねえものは為てい三昧なことをして、働くものは其日

の食にも困るつて法が全体世の中にありますけえ。

為吉 全く理屈にはづれてらア。それに見張りの奴等。たまさか為事をすると思ふと坑夫いぢめなんだ。

ここで忠平はストライキの話を持ち出す。

安太 (帰り支度をして来り) そいつは面白いや。己ア真先き其組に加入るぜ。

忠平 お前も何か不足があるのか。

安太 己にや別に言ふ事はねえんだが、騒ぐなア面白いや。

忠平 安の話はいつもこんなもんだ。時に為さん、お前のやうな古顔が加入つてくれると人数も集まるんだが、一つ力を貸してくんねえ。

為吉 若え時に何度かこいつをやつつけたよ。一度なんか、見張りの奴等を六番坑へ引摺り下してあすこから立坑へ突落したことがあつたけ。そりや此鉾山が転倒へるやうな騒ぎよ。

忠平 ふウ面白かつたらうな。そりやいつ時分の話だい。(中略)

為吉 前に言つとくがの、忠さん、ストライキが旨くゆくと思ふと違ふぜ。

忠平 有難う。なアにまかり間違へば佐渡へでも何処へでもふつ飛んぢまはアね。此鉾山ばかりが鉾山ぢやねえ。

為吉は、過去の経験からストライキが必ずしも成功するとは言えないと忠告する。

安太の「もう昇降機を巻く時分だぜ」の言葉に、為吉、長三、忠平が帰り支度をする。話題は再び昇降機の墜落事故のことになる。「今日は皆と一所に昇降機で行かねえか」という為吉の誘いを、長三は「己ア矢張り歩いて行かア」と拒む。長三の言葉で幕が閉じる。

(カンテラを取りて樋を出で)土の底も息づかひが苦しいが、坑外へ帰つても飯場ぢやいゝ顔はされねえし、あゝ、何処へ行つたら息がつけるんだか。

この作品を書くために、有三は足尾銅山まで取材に出かけている。有三が題材にしたのは、明治30年代の田中正造の足尾鉍毒事件ではなく、1907年の足尾暴動である。

長三は、過酷な労働の先にある死という運命から逃避しようとしている。安太は、愚かな行為によって現実から逃避しようとしている。忠平は、絶望的なストライキに突入しようとしている。為吉は、唯一理性的な人物であるが、もはや何事にも諦めている。こうした坑夫たちの姿をとおして、有三は、現実には直面し得ない人間の弱さを表現したのである。

II 「淀見蔵」——知識人の偽善

「女親」は1914年4月、第3次『新思潮』に発表された。のち書き直されているために旧「女親」などとも呼ばれている。1921年刊の作品集『坂崎出羽守』に「淀見蔵」と改題されて収録された。

3幕構成。賢太郎は東京高等工業学校の学生、舞台は賢太郎の実家の造り酒屋。夫に先立たれた女将のあさがひとりで酒造店を切り盛りしている。ときは賢太郎の妹、お光は使用人である。

とき、あアさう。ぢや行^{ゆき}掛けにこれを小包で出しておくれ。兄さんは大層急いでゐるやうだから。

お光、あの若旦那様の所へお出しいたしますのですか。畏^{かしこ}まりました。

とき、そりや兄さんは性^{せつ}勝ちなんだからね。直ぐにつたら直ぐに送らないと怒つてしまうのよ。お光、桐油^{ひも}と紐を持って来ておくれ。

お光、(桐油と紐を持って来て仕立物を包み始める、)まアいゝ御^{おじ}襦^{ぼん}袢でございますこと。とき、袖の地色がいゝだらう。お母さんが見立てたの。襦袢一枚だつて兄さんの事だといふとそりアお母さんは夢中になつちまうんだよ。

天理教の地区会長吉田が訪ねてくる。賢太郎が東京の学校を卒業して帰ってくるのが話題になる。

あさ、初め東京へ出します時には、商人の倅^{せがれ}には学問はいらないなぞと親戚の者は皆申したのでございますが、当節は男の子には教育をさせときませんと、恥をかくやうな事が起ると思ひまして、私は思ひ切つて出してやりました。今になつて見れば萬^{まん}更^ご無^む駄^だでもないやうでございます。

吉田、どうしまして、当今は学問がなかつた日には人の目上に立つ事は出来ません。お帰りになつたら御親父さん同様町長の位にお座りになさるのですな。

ここには、母親あさと吉田の口をとおして、世間的な価値観が語られている。亡くなった父親が町長であったことも語られる。

あさ、銀行の方はどうだつたえ。

善吉、農工へ参りましたらどうも裏書人がよくないからと申して切つてくれませんので……(中略)

あさ、利子は少し多く出してもいゝんだがね。善吉、それを申したのですが、銀行は昨今余程警戒をしてゐるやうです。何しろ田丸屋のやうな大きなお店がお辞儀をしてしまつたのですから。

あさ、さうだつてねえ。ほんとうにお気の毒な。(中略)

善吉、それからあの金融会社といふのに鳥^{ちよ}渡^と寄つて見ました。そこでは約手ぢや今は切れ

ないけれど何か抵当物なり担保品なりあれば融通してもいゝと申すのです。
あさ、抵当物といふと鳥渡面倒だね。

淀見蔵は、酒が腐る腐造を起こし、あさは女将として厳しい立場に追込まれている。

とき、え、入れました。(前の写真を見乍ら)鳥渡お母さん。どうしてお光はこゝの所がこんなに恰好が悪いのでせう。丸で身持の女みたいだわ。

あさ、それは撮り方が拙づかつたのだらう。

とき、顔も何だか浮腫だやうに写つたわ。

あさ、若い女が嫁に行くと、よくさういふ事があるものだよ。お前あんまり棚下しをするものぢやありません。

とき、でもお腹の辺りの恰好がおかしいんですもの。

あさ、善吉さへよかつたら、それでお前いゝぢやないか。

お光の体の異変が示唆される。「私は随分二人の為を思つてやつてるんだよ」とあさは言い、「こんなに三方四方よくいつたんですもの」とときは言っている。しかし、後に見るように決して善吉とお光のことを思っているのではない。家の体面しか考えていないのである。

賢太郎足駄を穿いて洋傘を下げて悄然として来る。肩には書物を入れたカバンを下げてある。とき子は暫く気がつかないである。賢太郎も無言で椽に腰をかけたまゝである。

とき、まア兄さんぢやないの。妾びつくりしたわ。

賢太郎、……………

とき、いつあらしつたの？

賢太郎、今来たのだ。

東京から帰ってきた賢太郎の姿は異様である。そ

れは彼の心の状態を暗示している。

とき、え。兄さん、手が汚れてお気の毒ですけれど共、其魚籠の中に残つてゐる魚を串にさして頂戴な。

賢太郎、己にか。(中略)

とき、兄さんは魚に食付かれるとでも思つてゐるのよ。随分弱虫ね。

賢太郎、う、俺は弱虫だ。お前のやうに残酷ぢやないからね。

とき、まア随分だわ。妾いつ残酷なことをして。

賢太郎、それ今やつてるぢやないか。まだヒク／＼動いてる魚を串ざしにしてその上火炙にするなんて、己にはとてもそんな虐い事は出来ないよ。

賢太郎は犠牲という存在に敏感になっている。しかし、自分からは何もしようとしない。

賢太郎はお光について尋ねる。ときは、店の従業員である善吉と結婚させることに決まったことを伝える。健太郎は「何故俺に一応の相談をしなかつたのだ」となじる。

とき、兄さんは屹度喜ぶだらうと思つてゐたのに。まア反対なんですね。だつてかうしなかつたら兄さんの名誉にも家の暖簾にもさはるぢやありませんか。兄さんが東京の立派な学校を出たつて、家の下女風情に手をつけたと知れたら、町の人は兄さんの事をどんなに下げすむでせう。

賢太郎、……………

とき、兄さん、お母さんの心の中も察しなくちや無理だわ。この事ぢやお母さんはどんなに御心配なさつたか知れなくつてよ。お母さんが便りにしてゐるのは兄さん許りなんですもの。その兄さんに何か事があつて御覧なさい。お母さんの心配つてそりやありはしないわ。若しか此不名誉な事が世間に

知れて御覧なさい。あの勝気なお母さんは
屹度死んでしまひますよ。

賢太郎とお光がかつて恋仲であったことが示される。賢太郎は母親とときの仕打ちを批判するが、それに対して積極的な行動をとろうとはしない。

あさ、まア賢太郎。どうしたえ。頭痛がするつて
医者に見せないでもいゝのかえ。

賢太郎、なアにそれ程ではありません。唯頭が
ボーッとしちまうんで困るんです。

あさ、矢張時候のせいなんだらう。でも医者にかゝ
る程でなくちやよかつたね。それでなくつてさへあの
大川の伯父さんはお前の事を弱い弱いといふんだから、
お薬でも貰て御覧。学校を止めた方がいゝ、なんて
また直ぐに言出すよ。あの人は自分の息子が鈍くつて
東京の学校に這入れないもんだから。お前の事が羨しく
つてさういふんだよ。

あさは賢太郎が頭痛がするというのを心配する。賢太郎は御飯が食べたいと言い、ときがお膳を運んでくる。

とき、取つて来た許りのをこしらへたのだから、
そりや生きがよくつてよ。

あさ、久し振で家の御飯を食べると旨いだらう。
どうかしたの。石でもあつたのかえ。

賢太郎、いや何でもありません。

とき、もう沢山なの。

賢太郎、腹が減つてると思つたが食つて見ると
矢張食へない。

とき、兄さん。一杯だけ食べるもんぢやないわ。

賢太郎、そんな御幣ばかりかつがなくつたつて
いゝ。己はもう沢山だ。下げてくれ。

食事をすることが犠牲を創り出すことに気付き、強い罪の意識を感じて賢太郎は食事を止めるのである。

医者で伯父の大川がやってきて、お光の体の異変を告げる。

大川、あれが風を引いたといつて二三日来私の所へ通つて
あるのだが、私が診察してあるうちに奇怪な事を発見したの
だ。初めは私にも気がつかなくつたのだが、今日よく見た所が
あれは確に妊身してある。

あさ、あの身持になつてるのでムいますか。

大川、未だ二月か三月の所だから、しかとは断言が出来んが私にはさう思はれる。何だつたねえ。店の者と一所になつたのは確か半月程前の事だつたね。

あさ、左様でムいます。

大川、これがその者の子ならいゝけれど、外に虫でもあつた日には面倒の事になるよ。第一店の暖簾にさはる。私はそれが心配だから一寸お話しとくのだ。

お光が妊娠していることが発覚する。あさの独白。

あア困つた事が出来てしまつた。一離脱れたと思ふとまたこんな事が湧いてくるんだからね。どうしてうちにははかう悪い事ばかり続いて来るのだらう。またあの女もあの女だ。ほんとうにあんな因果な女はありはしない。このまゝに捨て、おいたら、今迄折角骨を折つてした事も何にもならなくなつてしまふし。それに賢太郎の名前でも出やうものなら私はもう生きてる空はありやしない。何とか此まゝに済ましてしまふ方法はないものかしら。

あさは、お光のことよりも、賢太郎の名前に傷がつくことを恐れ、内密にすます方法を思案する。

藤平、アやつて井戸替をしたり、器械を買つたりしてラムネをこしらへるなんて余計な苦勞するやうなものだ。

善吉、お父さん、そんな事はないよ。春夏の暇

な所をやるには持つて来いの商売だと俺は思ふね。何もさう渡世違ひつて訳でもねえんだもの。

藤平、酒屋がラムネをこしらへたら随分渡世違ひぢやねえか。淀見蔵ともあろうものが、ラムネをやるなんて事があるものぢやねえ。

善吉、お父さんの様にさう旧弊なことを言つてゐたつて今は通らないよ。ラムネであらうが何であらうが儲かるものをやらなくつちや商人は損ぢやないか。

藤平は、息子の善吉がラムネ製造によって資金を調達しようと図るのを批判する。一方善吉は、父親の藤平が酔になつてしまった酒を菰包みにすることに不審を抱く。

藤平、(酒樽凡て包み終る) おい一寸手をかしな。樽を奥へ運ぶんだから。

二人で酒樽を奥蔵に運ぶ。

善吉、お父さん。こんな酒を何だつて筵包にしただえ。

藤平、おかみさんの命令でやつたんだ。俺もよく知らねえよ。

あさは、腐った酒を担保に銀行からの融資を受けよう魂胆である。

賢太郎、お前に本当に済まないね。

善吉、何をおつしやるんです。この位のことは雇人の当前のことでムす。

賢太郎、善吉お前人を憎いと思ふことはないかえ。

善吉、そりや人間でムいますから無いことはムいませんね。

賢太郎、あるだらうね。

善吉、え、でもそんなことはめつたにムいません。(中略)

賢太郎、善吉の後影に訳もなく御辞儀をす

る。御辞儀をすといつてもおかしな首の振方をするだけである。

賢太郎は、善吉に対して罪悪感を感じている。

賢太郎はお光に会い、手紙をよこさなかつたことをなじる。

お光、思つてゐない訳ぢやありませんけれども、余り身分が違ひますから私初めつから諦めてゐましたわ。それに私のやうなものがお傍にゐては若旦那様のお出世の妨になりますもの。

賢太郎、何故お前はそんなに自分を小さく見るのだらうな。もつと大きな心になれ。

お光、私にはとてもそんな心にはなれませんわ。私はかう生れつuitたんですもの。

賢太郎、何処までお前はいぢらしく出来てゐるのだらう。だからお前は計られてしまつたのだお前のやうにさう人のいふなりに動いてゐては、個人の尊厳といふものがないぢやないか。

お光、私そんな六図ヶ敷い事分らないわ。たゞご恩をうけたおかみさんのお言葉には叛く訳に参りませんもの。

賢太郎、御恩をうけた……お前は大した恩をうけてゐるな。お前のやうなものは殴られてゐる事を撫でられてゐると思つてゐるのだ。それぢや一生殴られ通しだ。

賢太郎は、淀見蔵の犠牲になろうとするお光を救おうと決意する。あさは金融社員と話をしていた。

賢太郎、お母さん、金を借りるのもいゝですがお母さんのやり方はよくないです。

あさ、高利の金なんか借りるなどいふのだらう。だけど今の場合ではそんな訳にはいかないんだよ。今年はいろゝ手違ひがあつたのでお金がゐるんだからねえ。商人がお金を借りたつて何が耻しい事があるものかね。

賢太郎、え、正当の方法で借りるのなら何もやましい事はありませんが、お母さんは詐欺を働いてるぢやありませんか。

あさ、えッ。お前親にむかつて何といふ物の言ひ様だえ。少し言葉を慎みなさい。

賢太郎、え、さうぢやありませんか。お母さんが担保に提供したあの酒樽はありや何です。酢でせう、腐つた酒ぢやありませんか。お母さんどうしてそんな寒^{とも}しいお心になつたのです。そんなことをなさると法律の罪人になりますよ。

賢太郎は、お光の件について母親を追及することも忘れ、零落した淀見蔵の再建について、あさと熱心に議論を展開し、倒れてしまう。

あさは、お光に妊娠のことを問いたです。

あさ、お前前からめぐりがなかつたのかえ。月さらへなんか飲んでみたのをちらと見た事はあつたけれども、まさかこんな事だとは少しも思はなかつたよ。かういふ事であつたのなら何故お前は言はなかつたのだえ。それならそれで嫁になんかやりはしなかつたのに。

お光、あの時分には私にも未だ分からなかつたので△います。おかみさんにいる▽御心配をかけまして済みません。

お光はなんとか自分で処理することを約束する。

お光、おかみさん、私どうにかいたしますわ。あさ、どうにかするつて、お前どうしやうといふの。

お光、……………

あさ、お前、無分別のことをするんぢやないだらうね。

お光、い、え、決してそんなことはいたしません。

若旦那様のお名前が出る様なことは。

あさ、呉々も短気なことはしないでくれ。人に知れない様に済ます法もない事はあるまいからね、
お光、(うるみ声で)はい。

あさは、お光の体のことよりも、淀見蔵の暖簾に傷がつくことを恐れている。お光の無分別な行為を心配しながらも「こつそり始末がつけばこれに越した事はない」と内密に中絶することをお光に示唆する。

賢太郎、(自得したる如くに)うるさい。お前などの知つたことぢやない。お前はもう他家へ嫁に行つてしまつた女だからいゝが、僕はこの家を立て、いなくなつちやならない体なんだ。お前なぞとは違ふんだ。
とき、だから早く直つてくれなくちやいけないわ。

賢太郎、(奮然として)お母さんの心配してゐる所を見ろ。僕は一日も早く偉くなつてお母さんを安心させなければならぬ。どうして俺は今こんな所に寝てゐられるぢやないんだ。(起き上がらうとする)

お光が犠牲になることに苦悩すると同時に、賢太郎は淀見蔵を立て直そうとする使命感に囚われてゐる。「個人の尊厳」という理想を理解しながらも、淀見蔵の現実を前にしてゆくべき方向を見失つてゐる。

賢太郎、それからお光の方はどうするのです。あさ、さうお前あれこれと気を焼かなくてもいゝよ。お母さんは悪いやうにはしないから。

賢太郎、然しお光はもう身持になつてゐるのですからね。

とき、まアそれは本当なのですか。何といふことなんでせうね。お母さんはほんとうにどうなさるの。

あさ、黙つておゐで。お前たちの悪いやうには計らへやしないから。賢太郎。お前お母さんのことは信じてくれるのだらう。

賢太郎、……………

あさ、ねえお母さんを信じてくれないつてことはないだらう。お前を生んだ親なんだから。

お前そんなことに気を揉むより早く丈夫になつてくれなくつちや困るよ。お前は家の柱なんだからね。お母さんがかうして働くのもお前があればこそなんだよ。

ときはお光に同情するが、あさは「賢太郎にはかへられない」と、お光を平然と見捨てる。

明日は明日はと言いながら賢太郎は結局何の行動も起こすことができない。ただ善吉に頭を下げるだけである。

賢太郎、^{たびたび}度々お前に済まないね。

善吉、どういたしまして。

賢太郎、今日は病気だからいけないが、明日はすつかり解決をつけるよ。さうしたらお前にあやまる所はあやまつて。

善吉、何をおつしやるのです。若旦那。あやまるの何んのつて。

賢太郎、明日は僕は何もかも始末をつけてしまふよ。それまではお前何もいはないでおくれ。

賢太郎突然悲痛の叫声をあげる。

やがて、賢太郎の病氣回復を願つて天理教の祈祷が始まる。出口のない困難の中で、あさは天理教つまり不合理なものに逃避する。

あさ、賢太郎や、なぜさう唇ばかり動かしてゐるの。お母さんといつておくれ、どうか一言でい、からお母さんといつておくれ。賢や、賢太郎や、賢太郎（段々涙声になる）あさはもう座にあたゝまれないであらゝ

と立上つて大きい方の座敷に行き、神前に打倒れる。もう泣く声も立てられない。

枕元の人々はワツと泣きくづれる。

廊下の向ふから声を立て乍ら藤平と善吉が来る。

善吉、まるで血の池地獄だ。何が何やら俺にはちつとも分らねえ。

藤平、いくら愚痴を言つたつて始まらねえ。お店へ来てまでそんなことを言続ける奴があるものか。

兩人小さい方の部屋の^{しきいひざまず}闕に跪く。

藤平、御病氣の中をこんなことをお知らせに上るのも何ですがお光が急に眼を^{つぶ}寝まして。

とき、え、お光が死んだのかえ。

善吉、いろゝお世話になりましたが、どうしたことやらこんなことになつちまいました。

（涙をふき乍ら丁寧にお辞儀をする。）

賢太郎は死んだ。お光の死が暗示されて幕が閉じる。

この最悪の結果から、有三が、家という存在を否定的に捉えていることが分かる。そればかりでなく、新しい思想に触れながら、現実の解決を一日延ばしにして逃避する賢太郎の姿には、理想を理解しながらそれを実践する勇気のない知識人たちへの厳しい批判を読みとることができる。

III 「曼珠沙華」——展望なき逃避

「^{まんじゅしゃげ}曼珠沙華」は1914（大正3）年12月、『帝国文学』に掲載された。1幕もので上演はされていない。主人公は富豪の未亡人、森住美紀子。

立派な日本間。肺疾に侵された美紀子は床に横になつてゐる。病の為に稍面ややおもやつれはしたけれど、その為に却つて凄味かえを増してゐる。女中が二人傍かたについてゐる。そのうちの一人は蓄音機をかけてゐる。符ふは呂昇の三勝のさばかりか何か。

秋の夜。をり／＼時雨する。

美紀子は、かつて親しかった役者の中村燕之丞むぎわら（播磨屋）の訪れを心待ちにしている。

美紀子。また降出して来たやうだね。本当に気まぐれな雨だこと。丸で肺病人の熱のやうだね。はるや、もう一度郵便の受函を見ておいで。

はる。奥様、今度は屹度きつと親方のお手紙が参つてをりますよ。（去る）

（中略）

はる。（仕立物を持って登場）あの矢つ張参つてをりません。

美紀子。親方の手紙は来てゐないの。

はる。はい。あのお羽織なげじゆばんと長襦袢のお仕立が出来て参りました。

美紀子。見せたくなくつたつていゝよ。あの人があるなくちや何にもならない。折角せつかく羽織や長襦袢をこしらへてやつても、居所いどころも知らせてくれなくつちや送ることも出来やしない。

手紙も来なければ、住所も分からない。話題は、燕之丞が演じた切られ与三郎の連想から展開する。

美紀子。妾わたしはさうぢやないよ。仮令たといゆすりに来ようがかたりに来ようが好いた男が顔さへ見せてくれりやこんな嬉しいことはないね。ところがうちの親方は顔どころか手紙さへよこして呉れないんだもの、妾はお富とみが羨うらやましくつてならない。

はる。いゝえ、親方はお人が悪いから何か魂胆こんたん

があるのかもしれませんが。たとと奥様をじらしておいて、一つおどかさうといふ趣向こぎに違ひちがひありません。

美紀子。妾はそんなことを当にはしてないよ。どうせ肺病やみの女なんか親方は思つてゐてくれないだらうからね。

美紀子の妹6歳の富貴子がばあやに連れられてやってくる。

美紀子。お前むぎわら麦藁は買つて来たの。

婆や。はい麦藁はたとと買つて参りました。

美紀子。ぢや姉さんが麦藁で人形をこしらへて上げませう。ね、それがいゝだらう。麦藁のお人形さんなら落としても破れなくつていゝわ。さアもう泣き止むのですよ。

婆や。奥様がお人形さんをこしらへて下さるさうですよ。まアようムんすこと。富ちやんはもう泣き止みましたね。お人形さんのお母さんなんですもの。

そこへ、声色使いの兼吉がやってくる。

美紀子。御世辞ごせじなんぞはどうでもいゝよ。それよか早く播磨屋を聴かしておくれ。

兼吉。「待てました。」なんて後で冷かしちやいけません。え、今晚は何を伺うかがひませう。「恋闇こいのやみ鶉飼うかひ療りび」「入梅入梅昔八丈」「夏祭浪なにわな花鑑がみ」え、何に致しませう。

はる。奥さんは「切られ与三」がお好きなのよ。

兼吉。え、「源治店げんやだな」。ようムんすな。紀の国やのお富に播磨屋の与三はどうしたつて動きませんや。ぢや一つ親方の与三をやらして戴おほきます。「しがねい恋なまが情なげが仇、命の綱の切たのを、（中略）死んだと思つたお富さん。無事に暮らしてゐ様とは、お釈迦様でも気が付めえ。」

はる。いゝえ、播磨屋！

兼吉、二三日咽喉^{のど}を悪くしてありますんで、どうか此辺で御勘弁を願ひます。

美紀子は、声色使いの兼吉の物真似で燕之助の声を聴いて、つかの間の落ちつきを取り戻す。美紀子は、燕之助のために作った羽織を兼吉に着せて、その襟を直してやる。

兼吉。奥さんお前ですが男つてそんな不人情なものでムいませんよ。

美紀子。いゝえ、いつかかういふ日が来るといふ事は妾だつて覚悟をしてゐたのだよ。だから妾何とも思つてゐやしないよ。

兼吉。奥様そんなに早くお諦めになつちや男の方がやりきれません。(中略)

美紀子。怒つてゐやしないから謝罪^{あやま}らなくつたつていゝよ。あちらへ下つてお酒をお上り。

それからたまや、その手文庫の中に播磨屋から来た古い手紙が沢山あるから、それをみんな持つて来ておくれ。古い手紙を新しい便^{たより}と思つて読直しでもして見ようよ。

兼吉は男の不人情を責めるが、美紀子はかえって機嫌を悪くする。

寝付かれない美紀子は、人形作りに取りかかる。美紀子の独白。

手紙の一本位書けさうなものに、何で妾をこんなに虐めるのだらう。妾ばつかりこんなに思ひつめてゐて、あゝ張合ぬけがしてしまうね。むかふでその気なら妾もその気になればいゝのだが、何故妾には思切れないのだらう。もとゞどうするといふ訳もなかつたのだから、別れる時が来たら、その時は奇麗に別れたいと思つてゐただけけれど、さアそれが今となつて見ると、妾にはどうしても思切れない。以前はそれ程未練な女でもなかつたのだがねえ。(中略)いつの間にか人形の顔が面長になつてしまつたよ。

燕之丞^{えんのじやう}さんに似せるつもりでもなかつたのだけれど、ついさうなつてしまうのだね。それにしてもあの闇の中に咲いてゐるしびとのはなはどうしてゐるだらう。矢張寂しいだらうね。

富貴子がやってくる。

美紀子。姉ちゃんが後^{うしろ}をおさへて居るから、手を延してあの花を取つておくれ。

富貴子。(手を延せしが) 姉ちゃん暗くつて怖いよ。

美紀子。怖い事はないよ。姉さんがこゝにゐるのだから。

やがて富貴子は曼珠沙華を取る。美紀子はそれを手にし乍ら。

美紀子。まア寂しい花だこと、妾のはいた血が固つて其まゝに咲いたやうな花だわ。

富貴子。姉ちゃんお人形さんをおくれ。

美紀子。(先程より稍苦痛の色ありしが、漸^{ようや}く重り来る) 一寸誰か来ておくれ。婆や、婆やはゐないかえ。はるや、たま。

富貴子。姉ちゃんお人形さんは。

美紀子。一寸姉ちゃんの肩を叩いておくれ。

富貴子。お人形さんおくれよ。

美紀子。むウ。(俯伏^{うつぶせ}に倒れる)

死を覚悟した美紀子は、燕之丞への恨み言を語りながら、古手紙で藁人形を体に巻き付ける。

あゝ息が段々苦しくなつて来た。妾もう手紙に火をつけてよ。あゝ其前に二人の死出^{しで}のお経と思つて、お前さんの恋しい手紙を何処か二行ばかり読みますよ。

「この世をば二人だけの世界にして、思ふまゝに送りたく候^{そうら}はずや。」
こんな事が書いてあるわ。

美紀子、手紙に火をつけて、人形と花の束をその中に立てる。

あ、燃える。燃える。赤い花が青い^{ほのお}焔に^{ふる}顫へて
ゐる。藁人形は苦しい^{こしい}太息をつゞけてゐる。
あ、赤い花も可愛い／＼人形もやがて焼け落ち
るだらう。その時が二人の最後の時なのです
よ。其時刻を間違ひないやうに、あの人に伝へ
てやらなければならない。そして親方に^{じつ}実があ
るものなら、時刻を違へずに妾の為に死んで下
さい。
屹度。屹度。屹度。

美紀子は、藁人形を燕之丞に見立て、自ら火を
放って死んでいく。燕之丞から捨てられたという現
実を受け入れることができない美紀子の姿は異様で
ある。

有三は「曼珠沙華」において、恋に身を焦がす
「真実の女」を描いた。しかし「曼珠沙華」は、現

実逃避の愚かさだけが目立って、何ら救いのない、
将来の方向性のない作品になっている。ここで、有
三は一種の行き詰まりを見せている。それは有三の
人生における行き詰まりとも見合うものであった。
(未完)

註

* <音読による授業構成の試み> シリーズの執筆意図につい
ては「音読による授業構成の試み——樋口一葉を例に」『教養
と教育』第5号（愛知教育大学共通科目委員会）を参照して
いただきたい。

[付 記] 本稿は愛知教育大学哲学教室1994年度卒
業論文、古川裕之「山本有三の初期思想形成につい
て」を踏まえている。文責は渡辺にある。